

豊岡市教育研修センターだより



豊岡市教育委員会 R8(2026).3.24

No.17

豊岡市のホームページにもアップしています。豊岡市HP→上段「暮らし」→「教育・学校」→「教育研修センター」へ

非認知能力向上対策事業 検証会議 ～豊岡の子どもに非認知能力を～

【ファシリテーターから】★子どもの様子 ☆アドバイス ○先生方の学び

- ★1・2年生合同で行った演劇WSでは、リードする2年生や2年生をお手本にしてやり抜く1年生、逆に1年生の動きに触発された2年生の姿もあった。
- ★大人に頼らず、自分の力で何とかしようとする姿勢が見られた。
- ★人への興味が育っている子どもが多く見られた。
- ★観る力が育っている子どもが多く見られた。(自分の経験が投影されている)
- ☆観察することが大前提。観察してからどのような関わりが必要か判断する、そして見落とさない。
- ☆原則、子どもたちのやりたいことに制御をかけない。
- ☆声かけをする際、心がけていることは、「子どもがもっているであろうイメージについて、具体的かつイメージが広がるような声かけをする」。
- ☆思ったこと、感じたことは、その場で伝える。例：「私には～のように見えた」など。
- ☆「やり抜く力」について大切なことは、子どもの言動に価値づけをする。やりたくない選択も受け入れる。「自制心」について大切なことは、まずは褒める。「協働性」について大切なことは、発言しやすい環境をつくる。つぶやきをひろう。
- ☆大人が先回りして動いてしまうことで、子どもたちがアイデアを引っ込めたり、能動性を失ったりする状況をつくらない。
- ☆子どもたちと関わる際、常に「自分が楽しむこと」を大切にしている。

【管理職・担当教員から】

- ★演劇WSが終わってからも、楽しみ会等で実施している。
- 国語の授業で動作化している。実際に動いてみることで他者理解につながっていると感じる。
- 子どもたちの言動について、価値づけを意識している。「やってみよう」という態度につながっている。
- グループ分けについて、様々なパターンを試みることで、意見のしやすい状況について学べた。
- 夢中になっている様子を第三者として観察できたが、「その言動の背景」を観ることを意識した。
- 「手を出しすぎない」ことが今年度の目標だった。
- 能動的になる仕掛けの工夫についてのヒントが多い。子どもに考えさせて、判断し行動につなげる。まさに普通の授業と同じ。一人一人の言動を拾うことで、様々な状況をフラットにしていると感じた。
- 文化庁事業で、3～6年生に実施した。実施については、肯定的な意見がほぼ100%だった。「前より堂々と動けるようになったり、自分から話しかけられるようになったりしました」との感想があり、個人もそうだが、学校全体が変わった思いをした。

【学識者から】

- ☆「**観る力**」を鍛える視点として、「一律にする欲望に抗う力」が大切となる。客観的、タイミング、関係性、特性等、その子どものもつ「氷山の下にあるものを観ること」。だから、常に子どもの様子を観察する意識が求められる。また、一人の教員だけでなく、学校の教員がバラバラでは成り立たない。
- ☆「**振り返る力**」は、協働的な支援につながる。演劇WSの中で、感想を言う場面があるが、回を重ねるごとに子どもたちが単なる「おもしろかった」とかではなく、「想像して感想を述べたり、または価値付けして述べたりする」子どもが増えてきた。ファシリテーター(大人)の動きが子どもたちに転移している。
- ☆「**集団としての非認知能力の高まり**」について、子どもがファシリテーターとして取り組む様子が見られた学校や、テーマを「変身学校」として、学校という場で自分たちは「変身できる=成長できる」ことを自分たちなりに表現した学校もあった。

非認知能力向上推進事業は、7年目となります。子どもたちの変容は、学校現場で様々な形で表出しています。大切なことは、学校、家庭、地域とともに子どもへの関わり方(ファシリテート)を共有することです。今後も、教育委員会だよりや各校の学校だより、オープンスクールやPTA総会等、ご家庭や地域での一コマを通して、子どもたちの非認知能力の向上に豊岡市一丸となって邁進してまいりましょう！